

能楽雑感～舞台への登場時のマナー

2017年 05月 04日

今日は、川崎での会でした。今回も、白謡会会員の素謡（朝長、葵上）や仕舞で大いに存在感を示して頂きました。

この舞台は、楽屋側との仕切りが薄くて、裏手で話し声がよく聞こえるのが難点で、今日も、素謡の途中で地頭の指示で、静粛にして欲しい旨の警告が2度も出されていました。

いうまでもなく、謡は謡う方も聴く方も精神を集中しなければなりませんから、会場の「静粛」が基本であり、観客も含めて参加者みんなが心掛けなくてはならないことです。その点で、今日は、もう一つ気になる事がありました。それは、地謡に参加する人達が切戸口から舞台上がる時に「どかどか」と騒音を立てることです。

概ね、地謡参加者は謡が始まってからしばらくしてから、頃合いを見計らって、地頭の指示によって登場する訳ですが、この時は、ワキなどが独演しているときで、せっかく盛り上がっている雰囲気、地謡参加者の舞台登場の足音でぶち壊れてしまいました。

プロは、役謡を謡っている本人が気が付かないほど、ひっそりと舞台上がることを習いとしています。

（この稿、H29年4月16日記）

能楽雑感～舞台での居ずまい

2016年 12月 30日

舞台上で謡を披露するときは、謡が聴衆に満足感や感銘を与えることを目指すべきであることは言うまでもない、当たり前のことですが、観客席からみていると舞台での居ずまいが気にかかります。

つまり、切戸口から舞台に入る時からの、演者の立ち居振る舞いが注目を浴びるのですが、一連のプロセスの中で最も気になるのが退場時です。

足がつって立ち上がることが出来なくなり、舞台にひとり取り残されてしまって、バタバタしている姿を間々見かけます。

先般の白謡会秋の会で大曲の「大原御幸」が上演されましたが、会の後でお役の一人を担当された長老の方が仰いました。「長時間だったので、終わった時に立ち上がれるかどうかとても不安だったのですが、お隣の x x さんがさりげなく私の腕を支えて下さったので、とても助かりました」

謡い終えた退場時に、足がつってしまい、無理をしてアキレス腱を切ってしまった方が、白謡会会員だけでも二人おられました。

退場時の姿は、見栄えの問題もありますが、肉体的な危険にも曝されているのです。

退場時に前後左右の人はもう少し気配りをして欲しいもの。

日本の伝統的な精神構造は、「和」であり、即ち「輪」であると思うのですが、伝統芸能である能の場面で、この精神が発揮されないのはおかしいことです。

2019年 03月 04日

今年に入ってからの同好会で改めて感じたことは、前回の小欄で記した「挨拶」の他に、副地頭の役割についてでした。

去る2月2日（土）の研究会でのことです。

手抜きをしている訳ではありませんが、いつもこの会では、出来るだけ私の出番を少なくして聞き役に徹し、次の配役を含めた企画に役立て湯としているのですが、今回改めて副地頭の重要性に気付くと共に、番組上、ミスキャストがあったことを反省しました。

最近、同好会などで、番組に副地頭の名前を明記する例を、よく見かけるようになりましたが、これは実に当を得たことだと思います。

プロの世界の例で云えば、あの梅若実の、自在に変幻する音色を支えているのは、いつも副地頭を担当している山崎正道師あつてのことでありましょう。

プロに比べたら、レベルが格段に異なるアマチュアの同好会においても、副地頭の貢献度如何で地謡の質が全く異なってきます。

では、アマチュアの同好会において、副地頭の心得、資質は何か。

私は、一に自制心、二に耳（聴解力）、それに、地頭との相性も要素の一つになりましょう。

副地頭が先ず心得なくてはならないのは、地頭に従うこと、声も地頭の九割がたに出すこと。副地頭として失格となるのは、地頭を差し置いての「はみだし」、「突出」です。特に引きにおいて、その過ちが出がちです。

このような失策を避けるには、地頭の謡に、間髪を入れずに追従することですが、それが出来るか否かは、その人の資質に依存するところが大きいのでしょう。

しかし、心構えだけは、副地頭としての自覚と自負を持ちたいものです。

では、地頭が明らかに間違えたときは、副地頭はどうすべきか・・・

そもそも、それは節や音程を間違えるような地頭を選定した番組編成者の過失ですが、放置してはとんでもない事態に陥ると判断したら、さりげなく、しかし、速やかに、地頭が正しい軌道に乗るように矯正していくことも副地頭の責務でありましょう。

能楽雑感～聴くことについて

2015年 12月 13日

昨日は日本橋会館で催された同好会に参加し、「實盛」の地頭を担当しました。
この曲は難易度が高い上、会員のレベルが高くて、自分としては勉強、試練の場と心得ているので、自宅ではほとんど聞いたことのないCDを、今回は事前に聞いて心の準備を致しました。

謡の上達の鍵は、聞くことが七割とか言われているようですが、確かにそれは真実であろうと実感しています。

但し、単に聞けばよいと言うものではなくて、それなりの心構えが必要ですが、それと共に、人様の謡を聞き分ける能力、即ち「聴解力」とも言うべきものが備わっていないと出来ないと思います。

聴解力には個人差がありますが、これとでも、修練によってレベルを上げることが可能です。

以下は、聴解力を高めるために、自分の長年に及ぶ経験に基づいて、理解していることを挙げてみます。

1. 聞き流しはしないこと。つまり、神経を集中させて聴くこと。BGMとしての謡は、上手の謡ならば、心地良いものですが、己の能力向上にはあまり役立たないように思います。
2. プロの上手な謡を聞くことも大切ですが、アマチュアの欠陥だらけの謡を聞くことも大切です。常に聞きながら、是々非々を判断することが大切です。
3. これだと思う、手本として選んだ謡は、反復して聴くこと。その都度教訓を得られます。10回聞けば、10回は得られるはず。何回も聞くうちに、突如悟ることも往々にしてあります。

4. 聞き取りたい要素は様々です。節扱いを始めとして、音の高低、音色、強弱、間の取り方などなど。これらを網羅的に聞くのではなくて、これらの要素のなかから重点を絞って聴き取ることもことも有効です。

5. 聞いて理解しただけではいけません。とても嫌なことですけれど、ときには、自分の声を録音して聞いてみて、聴いて得ようとしたことをチェックしてみることもトレーニングに役立ちます。

(平成27年12月11日

記)